

蠅螂の斧

第二部

トークライブ2001

第七回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

よろしくない現象だ。書き下ろし原稿に気に入らない。特に新規に始めようとした「続・家族理解入門」の動機が高まらない。一方で回顧記述は活性する。老化だろうか。しかし、昔話がしたいわけではない。今のことを語りたい。でも今だけの情報を語るような上っ面話はしたくない。

昨今の世の出来事が、今初めて起きたことであることは少ない。大半はこれまでにあったことであり、未来にもきつと繰り返されることである。人間の営みとはそういうものだ。だから、日付のある昔を取り上げて、それと今日を重ねて考えてみたい。

何となく昔は良かったなんて話は信用しない。自分の人生(つまり過去)を美化していたいのは、年取った人間の常だろう。忘れてしまいたいことや、忘れてしまったことも沢山あって、語らずにいる内になかった事のように感じられる。そうやって穏やかな記憶に包まれた老後を迎えるのが、御身安全の加齢スタンダード、なんて流れにのりたくもない。

戦争に行った私の父は、野戦病院で麻酔なしで痔の手術をされた話を何度もした。敗戦後、帰国になるまでの間も食料調達はしなければならなかった中国中央部の街での、情けなかった話をおもしろおかしく語るのが好きだった。しかし、戦闘の話はしなかった。聞かなかったからなのか、私が聞けなかったのか、前線には出て行かなかったのか曖昧なままだ。

私の時代、徴兵されるような戦争はなかったが、それでもなにかはあった。それなりに頑張ってきた世代であることも否定される理由はない。でも、この期に及んで、自分の老後(今だってもう十分老後だよ!)不安ばかり語っているようだと、自己中のうんざり世代として一括りにされても仕方がないが、それは本意ではない。簡単に一括りになんかしてはいけない。何事もディテールだ。だからこんな記述形式に拘るのかもしれない。今回、書いていてそう思った。

赤字が2001年9月の日誌

(今から15年前。私は54歳だった。)

09/03 イスタンブールからの帰路機中。「ブリジッドジョーンズの日記」(字幕あり)、「恋する遺伝子」(英語のみ)をやっていたが、鑑賞できる態勢にない。朝10時過ぎに関西空港到着。はるかで帰宅。

専門学校の夏休みで帰省していたこと葉(娘)は、一人で無事留守番をしていた。今日、東京に戻るらしい。入れ違いである。

こんな風にかけていた一週間後、9.11が起きることなど夢にも思っていない。私達の未来は、いつもこんな風に直前までなにも知らせてはくれない。

仕事場に10日ぶりに出る。メールの整理や旅行中に書いた原稿をパソコンに落とす。夕刻、幼なじみのAくんから電話。京都に来ているというので、久しぶりにあう。大手N社では出世頭の彼もリストラに怯えるという。役員寸前で年収1200万円の会社員。五十歳を過ぎて、サラリーマンはこの時代辛いモノだと思う。せいぜい自衛を。

こう書いたが、Aくんはこの後、鬱で五十代の中・後期をほぼ埋められてしまう。そのまま定年退職し、地域の住民(高齢者のヒーロー)として、役割を得て復活するのはずっと後のことである。この段階で何か、私に気づいてやれることがあったかとも思ってもみるが、思いつかない。長い音信不通の後、回復期に再会し、今後の話が出来たのは良かったと思うが、中学時代から知る彼の華々しい人生を考えると、この時期の持つ意味を考えざるを得ない。人は一色で自分の人生を塗りつぶすことはできないのだから。そして、この時間が彼に何をもたらしたかも、簡単には決められない。人間万事塞翁が馬は誰の身の上にも起きる。

09/04 昼過ぎ、二時近くなって出勤。何となく雑用をしているうちに時が経つ。時差ボケとも思わないが、旅疲れ。「ヒトクセある心理臨床家の作り方」(金剛出版)の原稿の修正と加筆。



川畑隆君達が編集していた「鬼相の心理臨床」という自主制作雑誌に連載していた文章を、出版しましょうと声をかけてくれたのが金剛出版にいた石井みゆきさん。

本が出たのは2002年10月だから、まだ随分先の話だ。この頃に、私の研修自分史を本にして、巻頭にカラーヒトコマ心理漫画ギャラリーまで付けてくれた編

集者に感謝である。今の出版状況ではとても出せないだろう。

09/05 旅疲れから、出勤が昼過ぎになってしまう。途上で、「木陰の物語」第十九話思いつき、ササッと仕上がってしまう。「ヒトクセ」のほうの家族療法の章、何度も読み直しておおかた完成。

躁状態のH君が企画したH市のプランは、案の定ダウンした。N市のMさんの企画と共に、今月は二つキャンセルになった。ヤナ感じもするが、この空いた時間に勉強しておこうかなんて。

家裁の7日のケースも取り下げになったとか。新件を頼まれかけたが断る。社会勉強の視点からは、調停の仕事も受けておくのがいいのだが、家裁の対応に少々うんざり気味なので。

家裁・調停委員仕事の文化と、自分のベースにある家族心理臨床文化とのギャップを常に感じていた。自分が役に立っていないとは思わないが、お役に立っても余り達成感がない。利用者・来談者があまり信頼できない。

現実なのだろうが、人間の悪くて弱くてずるい部分を引き出しやすい機関機能に違和感が拭えなかった。法とはそういうものなのか？

夕刻、F井君がSVIにくる。就職活動は難しいようである。良い奴なのだが、人柄で採ってくれるほど世の中にゆとりがないのか。ケース進展は例によって未熟さと自信のなさが重なって結果を出せない悪循環である。

職業選択にそれぞれの人柄が作用しないはずがない。何を指すかは、何になる能力が高いかよりも、その人個人の持つ欲望によるところが大きい。

ところが、どういう仕事で上手く出来るかと、人柄の間にはそれ程結びつきはない。むしろ、人柄で仕事をしてしまうと、危ないのではないかとさえ思う。

そういう意味で、彼は相談の仕事は向いていなかったのではないかと今振り返る。教員職に向いている人が、カウンセラーになりたがっているのを、一時期よく

眼にした。今はそんなことも減ったのではないかと思うが、どうだろう。

09/06 夜更かし朝寝のサイクルに、木曜日午前の相談室出勤が挟まると苦しい。眠い目を無理やりあけて出勤。にもかかわらずケースなし。一方、KISWECの土曜日は午後二件の新ケースが入ったという。

ポータブルDVDプレイヤーが中途半端な修理状況ゆえ、再度修理に持ってゆく。全くこの夏は壊れと修理の繰り返しだった。そう考えると、旅行中の酷い下痢も、壊れと修復のパターンか。ドトールコーヒーで木陰の物語の下書き。

夜更かし、朝遅めのサイクルは今に至るまで継続中である。午前三時前まで起きていて、朝は9時半まで眠る。幸せなことに、この間にトイレなどに目覚めることはない。ぐっすり6時間半は我が人生において、50歳での公務員退職以降の僥倖である。それまではずっと、慢性の睡眠不足、そして居眠りだった。

09/07 木陰の物語の来月号分、「解ける時」をフィニッシュして発送。その後、大阪に。



まだ第19話である。現在(2016年1月)、第192話を描き上げたのだが、この時、連載192回なんて想像もできない。更に、「家族の練習問題」のタイトルで単行本

が六巻も出る事も、連載雑誌が三誌もあることも想像すら出来ない。

未来に何が起きるかなど、想像できない日常で、その時できることを重ねてきた今である事実、あらためて思うことは多い。

09/08 kiswecの面接日。朝はSさんの10回目。もう1クール、今度は全家族面接にチャレンジしてみることにしたが、ストレスのかかる状況である。

午後一件目は、K市家族勉強会に来ているIさんの紹介ケース。歳の離れた娘の非行問題。しかしこのカップルには、結婚当初から凍り付いた恨みが母親にあったようだ。もっとも、今こうして来談しているということは、それはそれという扱いも出来るようになっているのであるが。しかし、長女、次女の命名について、二十数年も経って、妻が誤解していたことを知らされる夫も珍しいだろう。

三件目はH君が担当。新書「不登校の解法」を読んでいる人だった。男児二人の退行と粗暴、甘え、身体病の頻発。なんだか夫の話に実態とのズレの予感。

結局、①ケース目はあまり上手くいった感がなく終了した。現実には望んだ変化も起きていたから、投げ出したわけでも、ドロップされたのでもない。しかし家族心理臨床家としては、不満残しのままの終結だった。

来談者の価値観に、私の我が抑えられなかったのかなあとも思うが、先方の意地の張り具合が、事態を切り開いた力だったかもしれない。希な経験だった。

KISWECの家族療法は、ドンドンと言うほどでもないが現在も相談を受けている場所である。決まったスケジュールの曜日に、受付の人が入れた予約に従って相談にのる。千葉くんがセラピストをして、私はバックで見ている。

来談者の目的、目標に一步近づく道筋を探すのが役目だと思うので、カウンセリングや家族療法に拘らない。再現性や普遍性など気にもしない。その人にとって有益ならばよい。そう考えると、来談者の前で私は自由だ。

先日受信したXさんのメールが気になっているので、旧知のKさんに転送する。その中味は

『前略、新聞記事等マスコミ絡みで、個人の発言について神経をとがらせているのですが、現場の実情を知っていただきたく、個人的にメールを書きます。

わが県の**対応は、中央児相の何人かの意見で突然決まってしまいました。当時の所長の持論は「児相は消防署だ」、「誤報でも現場に急行すべきである」というものでした。

しかし、消防署はそのときだけの仕事です。なにかもやらなくてはならない状況にある、現場の多くの声はきいてもらえていません。知事がマスコミに発表してしまったから……と言う理由と、今の中央児相でリーダー的な存在の意見が強く、後戻りできません。

なぜ初めからこんなに無理をするのでしょうか…、この対応には、わたしのまわりは皆一様に反対しているのに。何故この対応なのか、いまだにわかりません。金曜日の夕方の通報のケースなど、誤報と推測されてもとにかく落ち度をあとで指摘されないようにと、調査する間もなくとんでいきます。本末転倒ではないかとみな思ってもどうしようもありません。

この対応のために、どれだけの犠牲を強いられているでしょうか。職員は疲れきり、仲間には休職や退職に至った人が何人もいます。ケースにとってもかなり無理なやりかたになっています。泣き声ひとつでも、学校等集団で確認がとれない時には、全て訪問して、安否確認しています。児相管内人口**万人、今年度3ヶ月で通告は120件をこえました。異常な状況でこのところ毎日のように緊急保護がでていて、騒然としています。職員は疲れきり、勉強したり、声をあげる元気もない状況です。本当に手をかけなくてはならないケースにどうしても手がまわりません。

限界を超えた、現実を考えないやりかただと思います。他県では真似をしないで下さい。むしろ、批判していただけるとありがたいです。

県に一番して欲しいことは、市町村や調査される側の理解と協力を求める施策です。突然の訪問は、する側もされるほうも極度に緊張します。泣き声ひとつで訪問される側は、踏み込まれたという意識になり、怒

るのは当然です。

OのTさんがおっしゃっていましたが、事前調査でセレクトしていく力量を持ち、本当に心配なケースに手厚くできることが、いま求められることではないかとおもいます。すべてをやろうとすることはとうてい無理なことです。でもあれもこれも、みなちゃんとやるように言われます。今は、火中の栗を拾うと怖いので、施設も関係機関もすぐに「児相に」と、ますますなってきました。周囲の理解のないところで、児相だけがやろうとしても限界があります。背負いすぎていると思います。事件があるたび、「やるべきこと」がどんどん増えて、何が重要なことかわからなくなってしまいました。警察のようだ…とよく思います。又、反面ケースがどんどん心が通じなくなっていて、「福祉」でやっていることの限界も感じます。「犯罪」と位置付け、入り口できちんとした警察の対応を行い、その後福祉が援助していくやりかたのほうがいいのではないかと最近急に思うようになりました。当児相では「援助」のスタンスで対応困難な事例が多いように思えるからかもしれません。ながくなりました。すみません。

ほんの少し秋らしくなってきました。おいそがしそうですが、御身ご大切になさってください。

* 15年前、児童虐待問題は既に、熱心に現場で頑張っていた人が悲痛な声を上げていた。それから長い時間が経ったが、私達はこの時とさほど変化は起こせないまま、騒ぎだけが過剰化したと思う。

策を誤ったことは、改めなければならない。「過ちを改たむるに、憚る事なかれ」と知りつつ、今更動かせないなど、原発事故問題後の社会の言説と相似形ではないか。

私は、この問題が迷路に突入していくプロセスで、一貫して信用ならないと言ってきた。児童虐待が児童福祉の中核問題であるはずがない。(それは警察の仕事の中心は凶悪事件の解決だ!と言っているのに近い。そんな無茶な話があるものか)

それは今も変わらない。だが現実には、児相職員の個人的力量の問題にすり替えられたり、もっと専門性を等という、何にでも当てはまるようなフレーズで目くらましを繰り返しながら、実はそう発言している人自身

が信じていないという、最低の状況を続けている。

業界人がみんな知っているながら、まあそれでも何とかなるだろうと思っている内に、こんなはずではない事態に至るのは、よく起きるパターンである。

最近あった地盤補強のくい打ち作業不正が明るみに出たとき、部内者はみんな、知っていたことだったから、業界内に驚きが走ったりはしなかったという。驚いたのは、「本当に建物が傾くんだ！」という点だったらしい。

笑い話ではない。専門家業界はこのように構成されがちなものである。だから用心が必要で、起きた事実にも則した検証が必要なのだ。

児童虐待で今、検証されなければならないのは、何故こんなに長期に渡って、このテーマが語り続けられなければならないのかということである。

09/09 朝、長男に典子が旅行の話大声でしているのを聞きながらうつらうつら。昨日、夜中に遊がやって来た。明後日から一週間韓国に出張だそうだ。あいつは二度目のソウルだが、今回は韓国に事務所開設の計画検分のためだとか。

図書館に寄って、イスタンブール絡みの本二冊他を借りる。仕事場に出てきてまたまた原稿校正。夜、ビデオを久しぶりに借りてきて観たがたいしたことがない。「悪いことしましよ」、リメイク物のコメディだがつまらなかった。「ダーク・エンジェル(3)ザック」はだんだんシリーズモノの出来になってきている。

09/10 「パイロットの妻」アニータ・シュリーヴ著・新潮クレストブックス読了。最後になってIRAが出てきてしまうのが、唐突感いなめない。アメリカでベストセラーになったそうだが……。三日ほどで350頁以上を読んだのだから面白くなかったわけではないが……。

KBS京都テレビから出演依頼のFAX。日曜の夜で空いているのでOK。学校の安全という話題らしい。

〇くんの修士論文の下書きを読んで、感心する。良く書けていて、良く理解できている。これが実践できればいいのだが。4時半過ぎ、大学院の同僚、中村さんと村本さんが仕事場来訪。後期のクラスターの進め方をうち合わせ二時間ほど。

この春から立命館大学大学院応用人間科学研究科で働き出していた。大学院勤務は初めてだし、要領が分からないことも多いが、中村さんが用意してくれた特別契約教授というのは、本当に私向きのポジションだった。間もなく15年を終えるが、まだしばらくは在職のつもりだから合っていたのだろう。

夜中、ビデオ「パーティカル・リミット」、期待していなかったせいもあるかもしれないが、なかなか面白い話だった。かねがねヒマラヤ登山が観光化している話は聞いていた。それでも登山家は禁欲的に生きるイメージがあった。だがこのベースキャンプの描き方を観ると、「空へ」の作家のエベレスト事件も、そうなのか……とあらためて納得させられる。



15年前のこんなところに、最近見た映画「エベレスト3D」で扱われた商業登山のことが登場している。ジョン・クラカワー著の「空へ」は、凄い本だった。そしてそれを映画化し、IMAXシアターで上映にこぎ着けている人々にも感動だ。

1996年、不幸な山岳事故は起きた。それを忠実に再現した「エベレスト3D」は私にとって、とても印象深い作品になった。作品としてより、この事実と背景に、私をもった関心の深さが大きいのだが。

09/11 澁澤幸子著「イスタンブールから船に乗って」が面白い。夕刻からぼむの集会で大阪に。その前に、梅田シネリーヴルで「イルマーレ」を観る。韓国の不思議

議な雰囲気恋愛映画。岩井俊二だなあと思う。「ぼむ」は相変わらずのオヤジ話。

終了後、SIに「妻を大学に通わせる」というアイデアを話す。実現できればいいのだが、彼にそれが出来るかどうか。システム論の理屈が分かることと、変化できることのギャップがどこにもあるからな。

帰宅してTVを観て驚く。NY同時多発爆弾テロである。映画顔負けのアイデアと実行力。シュワルツェネッガーがなぜ出てこないのだと勘違いしそうな映像。

どれくらいの人が亡くなったのか。これが21世紀のターニングポイントになったりしなければいいが。



実際、9.11はその後の世界への転換点になった。あの後、様々なことがあったが、一貫しているのは争いへの流れだ。押さえつけていた側の力が相対化され、抑えられてきた者達のエネルギーが増大し、無秩序に吹き出した。

民主革命的だとラベリングされた変化さえ、持続する安定は作り出せなかった。だからといって抑圧された平穏を了承するわけにもいかない。結局、世界は武力と経済のパワーゲームの果てに疲弊きって平和を目指し、エネルギーが充ちると又、金と武力の世界に逆戻りする繰り返しなのか。

クールな見方をすれば歴史上、そうではなかった時代を形成できたことはないと言うべきなのか。

09/12 朝は相談室に予約が二件。カウンセリングになっているかどうかは分からないが、何か動くようにやりとりしている。一件目は鬱病の夫を抱えた妻。二

件目は一年前、家を出されたと訴えてきた父親が、今度は高校1年の娘の不登校だと訴えている。問題作りの上手い、整理の下手な典型のような人。一緒に仕事している人も大変だろう。

午後は大阪・上本町の都ホテルで、更生保護学会という集まりで15:50から1時間十分話す。私の前は、またまた川上範夫さん。氏を前座にするのは二度目である。そのあと、ムジカのレストランで会食。講演は久しぶりだったがキラク快調でよし！

珍しく雑誌「臨床心理学」など読んでいる。まあまあ面白い。「イスタンブールからバスに乗って」読了。またトルコに行きたくなった。

今、自分がある姿の実感と比べると、世の中での自分の立ち位置について、あれこれ考えていたような気がする。だが、それにも何処か空々しいところもあって、結局何処かの内部の重要人物になったことがない。

権力を与えられたことがなく、個人的見解以外の表明をあまりしたことがないなあと振り返って、立場上の責任を持ったことがないのだと思いたった。

09/14-15-16 今日から三日間、原家族に焦点を当てたWS. 開始。Mさん、Oさん、Kさん、Wさん、Nさんの5人参加。少ないかなあと思ったが、実際はたっぷり時間が有益な三日間だった。それぞれの原家族のこと、記憶に残りそうだ。

終了後、H君の車で四条河原町まで出て、MARUZ ENIに。本を二冊、ご苦労さん購入である。同朋舎発行「望遠郷シリーズ・イスタンブール」が前から感じてはいたが、手間ヒマかかった都市ガイドブックであることをあらためて認識。これは写真と情報で埋められた一冊とは訳が違う。都市の教科書のような。図録がいっぱいなことに、コストや手間のことを思って感動する。

ギャラをいただいた後、こうして本を買って、コーヒーを飲みながらぼんやり眺めているのはいい気分だ。

仕事場に戻ると児相研MLに川崎君の一週間がアップされている。本を読むひまもなく働いている彼が、ご苦労さんで気の毒。

ここで書いた丸善は閉店した。そして2015年BALビルの地下でMARUZENは営業再開した。何だか嬉しかった。マニアックな出版社、同朋舎もたしか倒産した。変わらずにあり続けるものなど何もない。そんな時代だからこそ、有限であることは承知で、変わらずにあり続けるものを目指したい。

09/17 月曜日、敬老の日ということで両親を比良山麓のブルーベリーの郷レストラン「紀伊国屋」へ典子の運転で。母があまり元気なかったが、父もとても喜んでくれて、親孝行気分になった。

夕刻、仕事場へ。途上、「アラビアのロレンス」のDVD購入。待望の一枚で、仕上げが丁寧。なかなかいい感じのパッケージものに仕上げられている。後は本体が修理されてくるのを待つばかり。

もうDVDを購入することはほとんどなくなった。ブルーレイになったし、wowowやfulu、tsutayaディスクスでカバーできる。十五年でこんなに変化してしまうのだ。

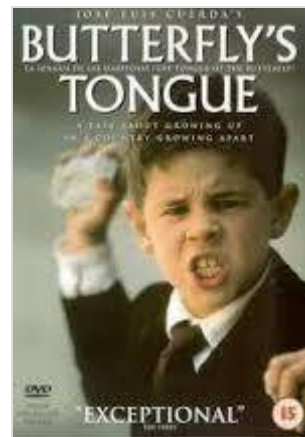
09/18 朝日新聞の児童虐待特集記事に、少し児相の現状に対する同情や共感の含まれた書き方を感じる。そういう流れにシフトし始めたのだろうか。12時30分から朝日シネマで「蝶の舌」を観る。いい映画だった。観ていてスムーズなこと限りなく、なぜこんなにサラサラ世界に飛び込んでゆけるのか不思議な気がした。タイトルバックのモノクロ写真からファーストシーンへの導入といい、幕切れといい過不足ない。そして厳しい映画でもある。母の強さが随所に感じられて家族を思った。

今年度収益見込みを上方修正したという吉野屋の牛井でお昼。今までと違った年輩の客が店にいる。客層の拡大が起きているのだろう。

メーリングリストにテロ事件のその後が見え始める。時代が動いたと指摘する声の多いのに不安が募る。どうもおかしいなあと思っているうちに、人間は変な勇ましさで戦争に突入していったのではなかったか。今、パキスタン政府要人は、苦渋の選択を迫られ

ている。どちらにしても市民が戦争の渦中に引きずり込まれるのか。

映画「蝶の舌」はフランコ独裁の始まる夜明け前、家族を護ろうとする母は、裏切りや嘘を辞さない。今がそんな時代ではないと、誰が言い切れるのか。夜中、TVで映画をやっているのを見ていたらなんとスペイン映画「ベルエポック」。昼間観た映画の先生役が出演している。ハリウッドに行ったペネロペ・クルスもでていて、なかなかいい味の作品。スペインのおおらかさあふれる物語。



日常的に歴史や社会の教科書を読むことはない。ところが映画を観ていると、突然、その時代の社会背景に引きずり込まれる。ナチ占領下のパリのレジスタンスだったり、ワルシャワのゲットーだったり。そこにある思いがけなさ、私が今いる場所のことを教えてくれる。

09/19 午後一番は家裁で虐待親の親権変更問題。二十八条問題とこっちの調停は関係ないのだが、大いに重なっている。子どもの様子が変わっているし、親の様子も変わっているが、母親の申し立てはそのままゆえ、裁判官と協議の上、調停不成立で審判に移行となる。

四時に出て京阪電車で門真市へ。門真教師勉強会第二クールの最終回。そこそこの人数で、家族造形法を試しながらのY川さん提出のケース検討。さて第三クールが実現できるものかどうか？

門真市、茨木市、八日市市(元東近江市)などでそこそこの期間継続開催していた勉強会は中断した。物事

の継続は本当に難しい。続く秘訣、続かない理由、そういう事にも関心がある。

09/20 木曜日、朝は相談室二件。新ケースは職場の人間関係。専門職の悩みというのはどのジャンルも類似している。午後、いつものhandsにカットに行く。京都の名門フランス料理店「万養軒」が閉店になったと聞いて驚く。時代の波は変化しないことを許さない。

寺町のパソコンショップへ。決心して店員の薦めで東芝リブレットを購入。これで使えるようになるのかどうか…。借りていたビデオ「シャフト」は以前に観たものだった。気づかないで又借りてしまった。悔しい老化現象。でも、見始めてすぐ分かったのではあるけれど。

東芝リブレットのこと、ほとんど記憶になかった。「シャフト」など全く心当たりもない。「万養軒」は子どもの頃、京都の親戚の法事の後に何度か行ったことのある老舗高級店だ。

ここぞとばかり大ぶりのエビフライを頼むのだが、たいてい帰路のカーブの多い京津線車内で吐いた。

記憶にあるもの、ないものの区別を見ると、老化は否めない。

09/21 朝一番、携帯電話に沖縄からの講演依頼。Sさんと大学教員の三人トークになるらしい。とんぼ返りの日程になるが引き受ける。

典子の眼鏡を作り新京極の眼鏡研究社に。作ってもらっている間に、昨日頼んであったノートパソコンの受け取りに。その後、La・masaで一緒に昼食。仕事場に来てトーク2001用の月刊通信を作成。



用紙を折ってカットして、トルコ土産の菜を挟む。京都市内で子育て支援事業を展開しているところから、

講師依頼。連続講座というので考えてみることにする。

絶好調に活動中の頃である。求められることがあれば動いている。まあできる間だからね。最近では新規のお座敷がとんとなくなった。継続プログラムで日程の大半が埋まってしまうせいもあるが、社会資源の人材として、もう新鮮味もないから。でも一方で、本人は飽きてしまった頃から売れるって話もあって。こういうことはわからない。

La masaは寺町二条のビルの奥まったところ、一階にあるスペイン料理店(仕事場DANと背中合わせのビル)。開店時からランチに足繁く通っていた。今では近隣に他にも三店舗ある店に発展。スタート時点から見ている、ずっと利用している常連店だ。写真はそこのイカスミのパエリア(私がこの食べ物と馴染みになったのは、30年以上前のスペイン旅行の時。そこでは、パエージャと言っていた。だからパエリヤは何とも語感が悪い。それはセビリヤではなく、現地ではセビージャというのと同じ)。

夕刻からのトーク2001は快調な話になったと思う。第二部の話が思ったより短くなったのが誤算。前半の言い残し話をして、9時まで。

深夜に反省もこめて寝床でテープを聴いてみたが、あっという間に一時間たった。自分のことだからそうなのかもしれないが、聞いてくれる人にも、あっという間の一時間であればいいと思う。オープニングで「遠い雷鳴」の話をした。どこまでピントがあっていたかはわからないが、そんな気分の今日この頃だ。

月に一度の講演会(トークライブ)を自主開催した目的の一つに、落語家さんの継続自主公演のイメージがあった。依頼される講演ばかり引き受けていると、同じ話をして欲しいという流れが出来やすい。要望があるし、準備も簡単だし、話すほどにこなれてくるから良いのだが、自分がマンネリする。

新しいテーマの話は手間がかかって、達成感、成功率は落ちる。しかし毎月、継続して自主講演会を企画すると、否応なしに新ネタで登壇しなければならなくな

る。ここに生じるノルマ感が自分を鍛えるだろうと思ったのだ。

09/22 昨夜眠り損ねたので、結局午前11時に起床。雑誌数冊を購入して仕事場に。昨日受け取ってきたノートパソコン、Libretto を起動し始める。基本的なセットアップは有料で頼んでおいたので、持ち帰って古い一太郎7のソフトをインストール。とりあえず動き始めるが、一太郎10をまたインストールせねば。日曜日だと思うとなんだか効率の悪い過ごし方をしてしまう。金剛の原稿を郵送。

明日からの産業社会学部での新しい授業「人間コミュニケーション論・実習」のプランを練る。夕方、眠くて二時間昼寝。リズムが乱れている。そのため夜は午前三時半過ぎまで起きていた。

そうか、2001年のこの時から「人間コミュニケーション論」の授業は始めたのか。今年で15年にもなっていたのか。この時始めた基本コンセプトのまま、15年が過ぎた。そしてますます、この形の必要性、必然性が高まっているように思う。同時に、個々にコミュニケーション上の課題を抱えた人が多い印象の時代になってきている。特に男子が目につくのだが、それは受講生の男女比率からも言えそうな気がする。スタートした2001年、受講はほとんどが女子学生だった印象がある。男子学生が皆無と言うことはなかったが二割未満だった。それが15年目の今年、徐々に変化していた受講生の男女比率が逆転した。今、4対6で男子が多い。

09/23 日曜日、アフガニスタンへの対応で田原総一郎番組は騒いでいる。辻本清美一人が女性であり、平和論者として孤軍奮闘している。勇ましい人が闊歩し始める度に、山田太一のドラマを思う。勇ましい人がもてる時代はいい時代ではない。

そして、トルコの軍事博物館でみたように、軍服はその時代に一番豪華にあつらえられていることを思う。男は軍服のようなカッコいい制服が好きなのだろう。



直ぐに異変が起きたわけではない。しかしあの頃の日本社会において、軍隊のこと、徴兵の事等を口走れば、次の選挙では間違いなく落選しただろう。

いま、そうではない空気が蔓延している。その分、心情左翼的言説は抑圧される。右傾化と言われることが起きていると思う。それは決して政治家がそうなのではなく、国民の作りだす空気の反映だ。

夜は「学校の安全」というテーマでKBS京都テレビの番組に出る。発言について思案中である。ノートパソコンを使い始めると、移動中の記述量が増える。

- * 自分の安全は自分で守る。
- * 予防にまず必要なのは個々人の想像力。
- * 多くのものは、ミスや被害をゼロにはできない。
- * コストが必ず関係してくるから、対策費は議論になってしまう。
- * 過保護は途中でやめられない。いまさら・・・
- * 景気や世論に左右されないのは、個人の自己防衛。

2001年9月の日誌は何故かここで途切れている。理由に全く覚えがない。ただ、この時のTV出演は全く愉快じゃないものだった。

登場した他の人たちの話の中身も態度も、うんざりするような時代迎合で、文字通りのマスコミ文化人。愚にもつかない持論の展開に、押し黙って過ごしていた。しかしTVだからその姿は映っていて後日、「団さん、不機嫌そうに座ってましたねー」と何人もの人に言われた。黙っていたらいいか・・・と思ったのは間違いだった。